

書写素材史の研究 — 国東治兵衛著『紙漉重宝記』 —

三保 忠夫* · 三保サト子**

Tadao MIHO and Satoko MIHO

A Historical Study of the Handwriting Materials

— Jihei Kunisaki, “Japanese Manual on Paper-making, *Kamisuki Chōhōki*” —

[Key Words: *Kamisuki-chōhōki*, *Jihei Kunisaki*, Papermaking-manual, *Sekishū-washi*, Japanese-paper]

Abstract

The Japanese Manual on Papermaking, “*Kamisuki Chōhōki*” was written by *Jihei Kunisaki* at Ōsaka in 1798. The Manual explains many techniques in the production of hand-made paper “*Sekishū-washi*” and illustrates about the equipment.

The present description is a report on the life of the author *Jihei Kunisaki*, the publishing background of his work and its block-books.

目次

はじめに

1 『紙漉重宝記』と著者

2 版本と複製・翻刻等

版本

[1] 寛政10年(1798)版

[2] 文政7年(1824)版

[3] 文政8年(1825)版

[4] 刊行年不明の版本

複製本

活字翻刻

謄写による翻刻

手写本

3 開板・版元・書肆

開板

版元・書肆

4 挿画絵師

おわりに

はじめに

書写素材とは、文字の誕生と相前後して発達してきた、言語を書記するための材料である。粘土と葦茎・尖筆、石・金属とノミ、パピルスと筆、パーム(ヤシ)と尖筆、紙と筆・墨といった書写素材は、人類がその英知を蓄積していく上で、かつ、それらを時空を越えた世界に伝達していく上で、想像もできないほどの貢献をなしてきており、文字や筆記の方法、筆具の成長、その他に多大の影響も与えてきた。

筆者は、これまで、主に、アジア各国におけるパーム・リーフ写本(Palm Leaf Manuscripts, 貝葉本)につき、用いられるパーム(ヤシ)の種類、書写料紙(リーフ)の調製、筆記の方法、書記言語、言語生活、その他を検討し、必要に応じてフィールド・ワークを重ねてきた。この種の写本は、南アジア、東南アジアに古くから行われてきたものである。

こうした書写素材・書写生活の他に、このアジアでは“紙”(Kami, paper)が開発・使用され、併せて、“筆”

* 島根大学教育学部国語科教育研究室(日本語学)

** 島根県立島根女子短期大学文学科

(Hude, Writing-brush)・“墨”(Sumi, Chinese ink) が用いられてきた。もちろん、この前後には、“金石”，“甲骨”，“竹・木簡”，“帛書”，その他も多用されている。しかし、中国、及び、その周辺の諸国でより広範囲に用いられ、かつ、精巧に改良されていったのは“紙”であった。

“紙”は、中国の古代に発明・開発された。古文献の記録はともかく、その「早期の紙」の実物例として、例えば、次のようなものが出土している。

- *中国甘肅省天水市放馬灘の前漢文帝・景帝の頃と推定される古い墓から発見された、地図の書かれた紙片。年代は、BC179～141年。[放馬灘紙]
- *1957年に陝西省西安市郊外灑橋の煉瓦工場の仕事場で前漢時代の墓が発見され、大量の紙片が出土した。麻類(大麻、及び、苧麻)の繊維によるもので浅黄色を呈し、質が粗く、籐紋もはっきりしない。表面には麻の筋や麻繩の端くれが残留していた。年代は、BC140～87年。[灑橋紙]
- *新疆ロプノールの烽燧亭の廢墟から発見された麻製の紙(長さ10センチ、幅4センチ)。紙質は白色、粗く、紙面には麻の筋が残っていた。前漢の宣帝時代、即ち、BC1世紀頃のもの(1934年、中国西北科学考察団)。
- *1942年に中央研究院によって、居延(カラホト)の近傍、バヤン・ボグト山の南のツァコルタイの古代の烽燧亭跡から発見された、植物性の粗い、厚手の籐紋のない紙。AD109から110年の間のもの。
- *中国甘肅省武威県早灘坡付近で発見された後漢末期、AD2世紀後半の墓葬から出土した器物の中に、木牛車の模型一輛があり、これに古紙が貼り付けられていた。同時期の文書用紙である。[早灘坡紙]

この他にも、1973年から74年にかけて、甘肅省居延考古隊が北エチナ河沿岸、漢代居延遺跡の肩水金閼跡で発見した前漢時代の麻紙2片[金閼紙]や、陝西省扶風県中顔村出土の陶製壺の中から見つかった2片の前漢時代の麻紙[中顔紙]などがある。

[参考]

潘吉星著『中国古代造紙技術史(文物所載)』、岩田由一訳、『百万塔臨時増刊』、1979年8月、紙の博物館、90頁、他。

銭存訓氏著『中国古代書籍史—竹帛に書す—』、宇都木章氏・他訳、1980年5月、法政大学出版局。151頁、168頁)。

銭存訓氏著『印刷発明前的中国書と文字記録』、1988

年。

銭存訓氏著『紙和印刷』(李約瑟編『中国科学技術史』、第5巻、「化学及相關技術第一分冊」)、1990年、科学出版社。

前川新一著『和紙文化史年表』、1998年4月、思文閣出版、3頁。

潘吉星著『中国科学技術史 造紙与印刷卷』(盧嘉錫総主編『中国科学技術史』)、1998年8月、科学出版社、第1編、第1、2章。

さて、中国における“紙”は、3、4世紀前後から、主に朝鮮半島からの渡来人、帰化人と共に日本にもたらされたようであるが、抄紙の技術については、「推古帝以前の時代にはまだ製紙工芸が普及しておらず、奈良朝となっても、それは官営の特殊工芸として専業の形態を保ち、まだ一般人の生活感情の中へしみこんでいなかった」のではないか、「日本の製紙が定着を見た時代は、古代の氏族社会が崩壊して、律令的社会が形成されようとする時期に当たっていた。」とされる(寿岳文章著『日本の紙』、1967年〈昭和42年〉4月、吉川弘文館、22頁・38頁)。

別に、史・外交文書・仏教・学問など、文字に関係ある文化の部門に活動したのは、大体、推古朝(593～628年)までは殆ど帰化人であり、倭人の文字使用は大化の改新(646年)後、天武朝からのこと、即ち、7世紀中葉からであるともされる(馬淵和夫著『上代のことば』、1968年12月、至文堂、52頁)。やはり、大化の改新前後から、日本人自らの手による文書作成量が格段に増え、これに伴い、用紙供給量の増加、紙質の向上等が求められるようになったのではなからうか。

製紙技術が導入されてより間もなく、日本では、麻より楮の繊維を主用するようになり、かつ、これにトロロアオイの根から抽出した「ネリ」を加え、「中国の「溜め漉き」に対し「流し漉き」と云う日本独特な紙漉技術を発展させ、早くも9世紀初期には和紙を中国へ輸出(森泉氏御教示『和紙』、1993年4月)するほどであったという。

製紙技術は各地に広まり、伝承され、今日、和紙といえ、日本文化の象徴的存在ともなっている。従って、和紙に関する研究、分析・調査、報告等の類は枚挙にいとまがなく、問題点を発掘するのも容易ではないが、以下には、島根県・石州半紙と関わりの深い『紙漉重宝記』について考えてみたい。

『紙漉重宝記』とは、日本の紙漉き製法を図解し、出版した本邦最初のものである。江戸時代、寛政10年(1798)に大阪で、次いで、文政7、8年(1824、1825)

に江戸でも刊行され、京阪・江戸を中心に販売されていた。著者は、石見国（島根県西部）美濃郡遠田村出身の紙問屋国東治兵衛、即ち、麻屋次（治）兵衛である。本書には、当時、「石州半紙」の産地として知られた石見国の山村部における楮の栽培・売買、紙漉きの技術・工程、道具、原料・粘剤などが細かく図示・解説されており、その労働や女性の役割、労苦の中にも取り交わされる母子の情愛や村人たちの会話・方言までもが細やかに描き写されている。

本書は、それ故、しばしば論及され、複製・翻刻が重ねられてきた。と同時に、世界に最高品質と評される和紙の製紙技術に関する文献として、最も早くから海外に知られ、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語等による翻訳・複製も、次々と刊行されてきた。

『紙漉重宝記』は、その内容においても、その本邦初の出版という点においても、独特の意義を有する出版物である。しかし、著者である国東治兵衛の生没年やその経歴等については、必ずしも明瞭でない。また、彼は、本来、実業家であって著述を生業とする人物ではなかったようである。著述は数点あるにしても、版元を通じて出版された書物は、生涯にこの一書だけであろうか。とすれば、世に数ある紙問屋の内でも、なぜ、彼に、この出版物があるのであろうか。石見国の製紙の現場に通曉していたからこそその特殊な一書であろうが、これを逆に見れば、石見と大阪との間の距離は支障にならなかったのであろうか。それら大都市文化圏との接触は、如何にして可能であったのであろうか。この出版には、当時、業界最大手ともいえる版元や版画絵師が関与している。版元や売出たちは、どんな算用や目論見で本書の出版を引き受けたのであろうか。

いろいろな疑問が湧くのであるが、こうした問題を解くには、やはり、出版された著書や刊行情況等に手掛かりを求めると他ない。十分な資料は得られないが、以下には、著者の生没年、版元や刊行の次第等について検討してみたい。また、今日に遺存する貴重な各種版本、所蔵本、その後の複製本・活字翻刻本等についても、できるだけの整理を行っておきたい。

1 『紙漉重宝記』と著者

『紙漉重宝記』の初版は、寛政10年（1798年）4月に出版された。著者（撰者）は国東治兵衛、挿画は靖中菴桃溪、版元は大阪（浪華）の大木野市兵衛であった。

『紙漉重宝記』の内容・構成は、以下のようになっている。原本に標題・項目名等が示されている場合はこれ

に「」印を付して転載する（振り仮名は省略）。それが示されていない場合は、私意により（）内に要旨を記す。オ、ウとは、その丁の表・裏を意味する。

〔内容・構成〕

- 「自序」（1丁オ・ウ）
- 「紙漉重宝記譜言」（2丁オ・ウ）
- 「人麻呂の像」（3丁オ）
- 「真楮苧之圖」（3丁ウ）
- （楮の栽培方、同種類、売価等）（4丁オ～5丁オ）
- 「冬楮苧刈とる圖」（5丁ウ）
- 「楮苧賣買之事」（6丁オ）
- 「楮苧むしの圖」（6丁ウ）
- 「同かハを剥く圖」（7丁オ）
- 「楮苧皮干之圖」（7丁ウ）
- 「同賣買の事」（8丁オ）
- 「同皮を漬置く圖」（8丁ウ）
- 「同うす皮を削圖」（9丁オ）
- 「同あく出しの圖」（9丁ウ）
- 「楮苧煮たきの圖」（10丁オ）
- （楮苧煮炊きの方法）（10丁ウ）
- 「楮苧再あらふ圖」（11丁オ）
- 「とろゝ草の種類」（11丁ウ～12丁オ）
- 「楮苧擲く圖」（12丁ウ）
- 「擲棒之圖」（13丁オ）
- 「半紙漉之圖」（13丁ウ）
- 「道具之圖」（14丁オ）
- 「其二」（14丁ウ）
- （漉き紙の種類、出来高算用）（15丁オ）
- 「紙干之圖」（15丁ウ～17丁オ）
- 「半紙裁切圖」（17丁ウ）
- 「半紙仕立る圖」（18丁オ）
- 「俵つくりの圖」（18丁ウ）
- 「濱出しの圖」（19丁オ）
- 「石州高角 正一位人丸大明神社圖」（19丁ウ～20丁オ）
- （寛政十・・・・の刊記〈後掲〉）（20丁ウ）

以上のとおりである。原文は縦書きであるが、印刷の都合上、横書きとした。半紙本で紙数全20丁であり、この時期、これは小冊子の部類に入るであろう。

なお、以下に、原文や刊記、その他、関連資料を引用する場合も原文の縦書きを横書きとする。本書を理解する上では、全文を翻刻し、本文内容の分析等を行う必要があるが、これらは別途に用意したい。

さて、『紙漉重宝記』の成立事情を窺うには、まず、著者の「自序」（1丁オ・ウ）が手掛かりとなろう。次

に、その要点と見られるところを抜き出そう。

- ①半紙（石州半紙）の漉き方のあらましを記し、それを生業とする人々の道案内としたい。
- ②紙を売買する商人は、都会に競合しているが、彼らは、その本末をわきまえず、その労苦を知らないから、紙を、まるで塵芥のように乱雑に使い捨てているのは心が痛む。それは、紙漉きの祖神の冥慮を憚らない行いである。
- ③これを家人や童蒙に教え諭そうと思ひ、その始終を画に表わし、1冊の本とした。
- ④友人の某氏が、これを刊行することを求めた。自分は紙の間屋であって、文筆に昏く、後人の失笑を買うのはわかっている。しかし、本書は、文飾や名文を意図するものではないので、友人の求めに応じ、刊行の趣旨を記し、本書の序文とする次第である。

以上の内、②に関しては、「自序」に次ぐ「紙漉重宝記譜言」（2丁オ・ウ）にも、「御国のごとき紙の生ずる事、異国になし。これを扱ふ買人、是等の事をさとり、必おろそかにする事を傷むべし。」と見える。著者は、紙を漉き作る側の辛苦を知っており、常日頃、そうした商売人たちの心ない言動を見聞きしては、深く心傷めていたことがわかる。「その本末を」とは、作る側の労苦があって初めて彼らの商業の成り立つことをいう。また、③につき、原文には「これを家童に教諭せんと」とある。「これ」とは、そうした②のような、嘆かわしい、また、恐れ多い情況・次第を意味するものであり、単に紙漉きの工程ばかりを指すものではない。「その始終を」の箇所も、単なるその工程全体との意味ではなく、紙漉きに伴うさまざまな精神的労苦を含めたものである。事実、本書の挿画には、冬場の水仕事の辛さ、手の足らぬ母に纏わり付く幼児のひもじさ、雪を踏んで浜出しに往復する男たちのガンバリ様などがよく描かれ、挿画の中の婦人たちが、「こしがいたア」（8丁ウ）、「手がつめたあけへめつたにこがならぬものじゃ」（14丁ウ）と、つつい弱音を漏らす場面も、ままた、見られる。

本書は、確かに、紙漉きの手順・工程を記してはいる。だが、それだけではなく、紙漉きという仕事が、どんなに難儀で苦勞なものであることか、これを強く、世に訴えたかったのではなからうか。天日干しの紙の1枚が、風で谷へ吹き飛ばされてしまえば、2時間もかけて拾いに行くのであり、しかも、それを、痛めないように割竹に挟んで持ち還るのである。著者は、この挿画に、「かんべんしておろそかに紙つかふべからず此図を見てその苦をしるべし」（16丁ウ）との心得を添えている。

紙を漉く側にとって、紙の1枚1枚が如何に大切な存在であったか、この割竹一つ取って見ても十分に理解されよう。

ところで、著者の国東治兵衛の経歴、生没年は、未だ十分に解明されていないようである。これにつき、かつては、次のように説かれていた。

即ち、矢富熊一郎著『国東治兵衛翁之治蹟』（1940年〈昭和15年〉7月、島根県美濃郡安田村図書館発行）によれば、彼の祖先は、代々豊後国植田荘（今の大分県大分市）に住していたが、国東郡を経て石見国美濃郡遠田村に移った。遠田村に定住したのは徳川時代に入ることと推測され、国東姓を名乗り、和佐田を屋号とするのもそれ故のことだとされる。治兵衛は、石見国美濃郡遠田村に生まれ、その「生年は元禄の末葉とも云はれ、寛永の初期とも云はれて」、「優に九十歳の寿を保ち、寛政の末年逝去した事が想像される。」（3～5頁）、享保の大飢饉の後、奮起して蘭草栽培に乗り出した同19年（1734年）は、彼の30歳前後である、と述べられた（3、4、12頁）。元禄末年（17年、1704年）に生まれたとすれば、享保19年は31歳、寛政10年（1798）年は97歳となる。97歳とは、大変な長寿ではある。

遠田村は、その後、明治22年（1889年）に津田村と合併して美濃郡安田村となり、昭和29年（1954年）に益田市遠田町となった。また、この著者の矢富熊一郎氏（明治26年～昭和56年〈1893年～1981年〉）は、益田市津田町に生まれ、益田工業高校長、島根県文化財専門委員等を歴任し、市町村史編纂等に従事した郷土史家である。当時、同美濃郡安田村大字津田1359番地に居住し、『安田村発展史 上』（1941年1月、同図書館発行）を執筆していた。『国東治兵衛翁之治蹟』は、同書から当該部分を抽出されたものらしい。

しかし、矢富氏は、その後の著書『益田市史』（1963年〈昭和38年〉11月、益田郷土史矢富会発行）と『国東治兵衛』（1965年〈昭和40年〉4月、益田商工会議所安田支部長山崎重樹編集兼発行人）において、彼の祖先は、豊後の国植田、国東を経て、江戸時代に石見国美濃郡遠田村に定住した、「その末裔たる治兵衛は、寛保三年（1743）八月三日、遠田に生れた。長じて紙間屋として生計、石見半紙を買い集めて、大阪に送りこれを売りさばいていたが、後には大阪長堀清兵衛町に、出張店を作って自ら出張し、一名麻屋治兵衛、または麻治とも称して、営業にいそしんだ。これは半紙の一面、石見麻の取引をもした関係からである。」（298頁）と改訂され、在阪中の彼は、岩井左右圭彦について、神道を学び、敬神の思想に感化された、書画と俳句に秀でた彼には、紀

行俳文として、有馬温泉に入湯した、(寛政10年8月)『播州姫路海道記』がある、54歳の時、『紙漉重宝記』を著した、書中の版下は、治兵衛自身の手によって書かれ、挿画は、丹羽桃溪に補筆を請うておると述べられている。

ここに、その生年は「寛保三年(1743年)」であるとされ、「長堀清兵衛町」、「麻屋治兵衛」、「岩井左右圭彦」、「播州姫路海道記」といった固有名詞を挙げられている。ここに至った事情なり根拠なりは明瞭ではないが、『益田市誌』下巻(1978年〈昭和53年〉6月、益田市発行)によれば、この間(昭和20年代末)に、国東治兵衛の自筆の著書が発見され、それによって彼の経歴の一端が判明したからだという。

『益田市誌』下巻(753~754頁)は、昭和29年(1954年)1月1日付、益田市安田公民館発行の『やすだ』(旧美濃郡安田村の新聞、B5判)に掲載された矢富氏の記事を引用し、これをもって矢富氏の改訂版の説明とする。この引用文には省略が多く、誤りもあるので、次に、安田公民館に保存されている当時の新聞『やすだ』から直接、記事の全文を転載しよう。但し、原文は、縦書きで4段構成、見出し・筆者名を含めて延べ103行、各行15字からなるが、次のように改める。また、冒頭の見出し「国東翁余録」の5ケ字の右傍には・点が付されているが、今、省く。

国 東 翁 余 録

矢 富 熊 一 郎

国東治兵衛の自筆本が、最近ふとしたことかたら発見された。それは有馬入湯日記・播州姫路海道・俗説集上下二冊・禅家問書の五冊で、益田市益田菊井茂一氏の蔵本中から見付けたのである。この発見によつて、治兵衛は従来考えられていたように、石見畳表や石見半紙の指導や奨励をしたと云う、単なる産業人の面のみでなく、文化人としての一面をふくよかに持つ、幅の広い人物だつたと云うことが確認された。

治兵衛は大阪長堀清兵衛町に出張問屋をおき、郷里の遠田と大阪の間を、始終往復の上紙の売りさばきをいとなんだのであつた。清兵衛町は現在の長堀川に架してある。^(ママ)玉造橋北詰の浜側にあたるところである。

大阪での彼の店は、麻屋治兵衛と名乗つているところから考えると、国元で紙とともに麻の問屋もいとなんでおり、或は紙よりも麻屋を先にやつていたのではあるまいかと想像もされる。だから寛政十年出版の紙漉重宝記も、大阪に逗留中、大阪三郷総年

寄たる江川庄左衛門外三名を経て、町奉行へ開板願を差出して許可を得たものである。

新しく発見された有馬入湯日記は、彼が大阪を出発して、有馬の温泉に入湯した旅日記である。この入湯は、重宝記を出版した直後であることから見て、著述のため相当の気疲れを感じた彼が、心気を一転させるための、慰安旅行であつたことに気づく。この日記は芭蕉の奥の細道を模した俳文である。各日附の末文にさしはさんだ俳句は、各務支考の流を汲んだ美濃風のもので、その影響は美濃流の宗匠百茶坊あたりから受けたものゝようである。大体江戸時代における石西の俳句は、益田の三条井連を中心に盛行したにもかゝらず、遠田や津田からは、わずかに一兩人位の出現を見るに過ぎず、きわめて微々たるものであつた。が、この日記を見ると、治兵衛の俳文なり俳句は、相当に高く評価せられ、当時の安田地区が、益田のそれと比べて、そう低い文化地位のものでないことが知られた。

次に治兵衛は俳文ばかりでなく、絵と筆蹟も上手であつたことが知られた。達筆ともいふべき上述の自筆本の文字は、彼の著紙漉重宝記の版本と、同一筆法であることからして、重宝記は彼の自筆版だということが分つた。そして彼の絵の筆法は、重宝記中の丹羽桃溪の名所図絵の描法とよく似ておる。製紙の操法について、一顧の知識すら持合わさない桃溪が、これほどまで正確に描いた絵に対し、日頃から私は驚嘆していたが、結局重宝記の絵は、治兵衛の考案による巧みな絵を、桃溪が補筆したものであることが確認され、疑因がこゝに一掃されたわけである。治兵衛は桃溪よりも十四歳の年長者である。だから二人の関係は、友人関係としか思われぬ。恐らく治兵衛は桃溪と同様、丹波丸に師事したものでらしい。

紙漉重宝記を見ると、治兵衛は高津の柿本神社を崇敬しておるが、この敬神思想は、神祇道の師岩井左右の影響を受けたことも今回分つた。

中でも最も大きな発見は、治兵衛の生年月日である。従来元禄、宝永の交と推定されていた月日が、寛保三年八月三日と確認されたのである。従つて紙漉重宝記の著作は、彼の五十五歳当時のものと知られたのである。

従来治兵衛夫婦の墓の間に立つ、早世梅童女の墓は、治兵衛の幼児を葬つた墓とされていたが、今回の発見で、父子関係でも何でもない、別の墓が治兵衛の生前から、置かれていたものであることが知ら

れた。

とにかく、今回発見された治兵衛の自筆本は、彼を知る上に貴重な本である。

以上が『やすだ』からの引用である。貴重な情報が盛り込まれている。往時の資料の保存に努めて来られた安田公民館の御努力に感謝したい。

問題は、「今回発見された治兵衛の自筆本」である。この5冊があれば、矢富熊一郎氏の感激を追体験しながら、「国東治兵衛」についての確認作業や諸研究が可能となろう。しかし、現在、その所在は不明である。先の『益田市誌』下巻でも、引用を行った後に、「(註) 現在この五冊の本は、菊井家には残っていないという。」と注記を付している。『国書総目録』・『古典籍総合目録』(共に岩波書店刊)などを繙いても、『有馬入湯日記』、『播州姫路海道』、『俗説集』上・下二冊、『禅家聞書』についての記事は見当たらない。とすれば、「国東治兵衛」についての第一線情報は、依然として『やすだ』の搭載記事にとどまることになる。この点でも、同紙は貴重な存在である。

さて、矢富熊一郎氏の新出資料についての報告により、国東治兵衛の生年月日、及び、経歴の一端が判明したことになる。

治兵衛が寛保3年(1743年)に生まれたとすれば、享保の大飢饉(同17・18年<1732・33年>)は関係ない。彼が、大飢饉に遭遇し、奮起して蘭草栽培に乗り出したとすれば、それは、天明3年(1783年)から同6年にかけての大飢饉であったことになる。折しも41歳の壮年期であり、『紙漉重宝記』執筆の寛政10年(1798年)は、56歳に当たる。

大正14年に堀越寿助氏によって『紙漉重宝記』が複製された折(後述)、その巻末に「國東治兵衛翁之墓」「國東治兵衛翁頌徳碑」「國東治兵衛翁之舊宅」の図版(白黒写真)が収められている。

墓碑の図版には、「石見国美濃郡安田村字遠田に於ける同翁旧宅の傍なる小丘の上であり」、頌徳碑のそれには、「墓碑を距る数町の同じく遠田地内に在り／大正十三年九月同地方の蘭筵業者に依り建設せられしものなり。」、旧宅のそれには、「この地小字を「ユノエキ」と称す。ユとは蘭の石見訛にして、エキとは両山の間奥まりたる地の意なり、以て翁の蘭筵に関する功績を語るに足らん。／尚ほ右方に見ゆる松樹下の大なる墓石は前記の翁の墓なり。」と、それぞれ解説が添えられている。

国東治兵衛の「旧宅」は、一軒屋であったというが、今は存在しない。和佐田家の墓所は、その旧宅の裏手の山腹に位置するような形だが、この一帯は、昭和40年代

に開発・造成され、人家が増えて今の新町名を「国東町」という。

治兵衛の墓石の碑文には、「崇室了善信士」とあり、また、左側に位置するその妻の墓碑には「法海智松信女」とある。共に没年・享年は刻まれていない。夫妻の墓の間に早世した娘のものといわれたやや小さな墓(「早世梅心童女」)があり、これには「享保九年辰(1724年)十二月二十九日亡」とある。この記年により、かつて、国東治兵衛は、享保九年に遠田村に住み、その10年後、蘭草筵の生産を始めた、とされた(『日本農業全書』、第53巻、71頁。その他)。しかし、年代上、大きく矛盾する。

そこで矢富氏は、上述のように、夫妻の墓とその間の童女の墓とは別物であると考えられたのである。亡くなった順に墓を建てていけば、そういうこともあろう。あるいは、今日までの間に、何等かの事情によって墓石が移動することもある。

和佐田家の墓地や糸函については、矢富氏著『国東治兵衛翁之治蹟』(5～10頁)に言及されている。だが、問題の2基が治兵衛夫妻のものだということは確かであろうか。筆者には、この点が、まず、懸念される。

2基の墓石には、死没年月日も行年も刻まれていない。これが、また、不審である。矢富氏は、15柱の墓石14基の墓籍に言及されている。が、死没年月日も行年もないのは3基だけであり、この内の2基が治兵衛夫妻とされるもの、他の1基が「本相智成居上座 長州江崎 圓通主庵」と刻まれているものである。寛政、天明、明和、安政、明治、天保、文政、文化といった年号はもちろん、死没の月日まで刻むのが通例であろうのに、これはなぜであろうか。

思うに、3基の墓石の主は、故国を出て他国で亡くなった人物ではなかろうか。3基の内に、長州江崎の地で亡くなったと見られる庵主がいるのも参考になる。

墓葬には、埋め墓と詣り墓(拝み墓)との両墓制を用いることがある。前者が本墓であれば、後者は、遺髪等を埋めて石塔を建て、霊を祀るのである。3基は、その後者であろう。この場合でも、戒名・法名、死没年月日、行年等を刻むのがふつうであろう。しかし、既に故国に身寄りや親戚・縁者がいないこともあれば、遠方で亡くなったり、資力がなかったりすることもある。その建設までに日月を費やすこともあろう。こうした場合、死没年月日や行年の記入が漏れることもあるのではなかろうか。

問題の2基が、治兵衛夫妻のものであってもなくても、3基については、このように考えられる。

ところで、上の頌徳碑には、「〈石見蘭筵開祖〉 治兵衛翁頌徳碑〈正三位子爵持明院基哲書〉」と見える(〈 〉内は小字)。国東治兵衛は、天明〔三保注：享保17年(1732年)を改めて〕の大飢饉に触発され、豊後・備後から蘭草を取り寄せ、遠田村に蘭草を栽培し、石見蘭筵・遠田表(畳表)の生産・普及・振興に尽力した人物として著名である。彼の努力は、やがて隣郡・隣国をも潤すこととなり、浜田藩主松平周防守康福侯(生没年は享保6年～寛政元年〈1721年～1789年〉、享保4年生まれとも、第7代・第11代藩主)により、「間仕事取調係」を拝命した。顕彰碑は、その偉業を讃え、「発起者安田村」によって大正13年(1924年)9月、遠田丸山の地に建立された(既出の『益田市誌』下巻, 754頁)。正確には、この時、丸山の下、国道9号線に接続する村社遠田八幡宮賽路の右手、「美濃郡安田村大字遠田字丸山三千五百拾五番地」に建立されたが、後、道路拡張工事のため、9号線の向い側に移され、更に、今の丸山の上に移設された。

その右傍らには、また、建立の年月を同じくする、やや小さな石碑「〈石見蘭筵／組合創立者〉好五郎氏碑」(斉藤好五郎氏〈1825年～1901年〉の顕彰碑)が建っており、この発起者が大島牧太・福原友一郎・大石幸太郎の3名の連名になっている。大島牧太氏は、県会議長や石見蘭筵組合長等を歴任した人で、これら2基の石碑建立の募金活動は、同組合の主導で行われた。当時の「碑表建設許可願」や図面、奉加帳などの関係資料は、今、福原友一郎氏の孫福原克己氏(益田市遠田町在住)の手文庫に保管されている。

国東治兵衛は、蘭草、畳表、麻、石州半紙の生産、また、椎茸(ナバ)栽培など、地場産業の開発に尽力した人物であったが、一方、大阪に店を持っていた。「長堀清兵衛町」とは、現在の大阪西区新町4丁目をいう。長堀川が木津川に注ぐ地点の北岸に位置する片側町で、ために、各国の国問屋船宿が多く、出雲・石見の国問屋もここにあった。少なくとも寛政の時分、国東治兵衛が「麻屋次兵衛」の名でここに店を有していたことは、『紙漉重宝記』の「開板御願書(扣)」(寛政9年11月)によっても確認できる(第3節)。

彼は、麻屋の看板の下に、石州産の麻・蘭草・畳表、和紙などの販売業・取り次ぎ業を営んでいたであろう。「紙の問丸」、即ち、出版用紙の供給・納品者として、次節以下に見る版元たちとの交流もあったであろう。商売にゆとりが生ずれば、人並みに俳句・俳画、狂歌といった習い事や遊芸も始めたであろう。『紙漉重宝記』の「自序」末に「友人何がし是を梓にちりばめん事を乞

ふ」(友人のもとに^{ゆうじん}に^{おもう}応じ^{そのおもむき}其趣^{しる}を記して此序と成す事しかり」と見える。こうした「友人」とは、文人といった類の人々ではなからうか。国東治兵衛が、紀行文や俳文等を物していたことについては、新出資料による矢富熊一郎氏の言及がある。

2 版本と複製・翻刻等

本書は、寛政10年に初版の刊行を見た。この初版本(13点)、また、重版本(2種4点)、その他(1点)については次がある。

これらの諸本の所在については、『国書総目録』(第2巻, 223頁, 岩波書店刊)、『古典籍総合目録』(第1巻, 182頁, 岩波書店刊)から大きな恩恵を得たが、調査の結果、一部に私意をもって加筆・修正を加えたところがある。

版 本

[1] 寛政10年(1798)版

- 国立国会図書館蔵本
- 東京国立博物館蔵本
- 九州大学蔵本
- 京都大学蔵本
- 慶応大学幸田文庫蔵本
- 東北大学狩野文庫蔵本
- 岩瀬文庫蔵本
- 竹清文庫蔵本
- 天理図書館蔵本
- 無窮会図書館神習文庫蔵本
- 村野文庫蔵本
- 野津左馬之助蔵本
- 大東文化大学高島蔵本

右13点の内、若干の版本について言及しよう。

○ 国立国会図書館蔵本

外題は、原題簽に「紙漉重宝記 全」(左肩、双郭)とある。図書番号, 106/合1/221。1冊。線装本・四つ目綴, 袋綴。柱刻は「○紙漉 (丁数)」とあり、第20丁目の丁数は「二十畢」と見える。魚尾はない。本文は縦書きの漢字・平仮名交り文。挿画はあるが彩色はない。寸法, 半紙本(石州半紙), 縦22.9センチ, 横15.7センチ。題簽匡郭, 縦15.8センチ, 横2.8センチ, 本文匡郭・四周単郭, 縦18.1センチ, 横12.6センチ(丁によりて小異あり)。ねずみ色の原表紙。紙数, 本文19.5丁(「自序」・「譜言」の各1丁を含む)、刊記0.5丁。料紙は石州半紙。所蔵元に関し、1丁オモテ、また、2丁オモテに「帝国/図書/館蔵」の方形朱印(一辺4.7セ

ンチ), 1丁オモテに「購求・明治三三・三・三一／帝
図」の円形朱印(径2.0センチ)がある。1丁オモテ右
下隅と20丁ウラの左下隅に「一上紙四郎」との楕円形黒
印(縦2.4センチ, 横1.3センチ)の捺されている点に注
意されるが, これは装丁時のものであろうか, あるいは,
版元の手になるものであろうか。

刊記(原本は縦書き。以下同様)

「
 国東治兵衛選 [印形]
 靖中菴桃溪画 [印形]

寛政十戊午四月吉旦

大野木市兵衛

浪華書林

海部屋勘兵衛

(以上, 20丁ウラ)

「國東」「靖中菴」の印形は陰刻である。「寛政」の「政」
字の第4画の頭部(先端)に黒い点が見える。板木の汚
れであろうか, これは, 後の文政7年, 同8年の版本に
おいても同様である。

なお, 題簽匡郭や本文匡郭の寸法は, たとえ, 同一版
(版木), あるいは, 同一書(個体)でも, 計測する部
位・場所, 丁などによって差異がある。

この他の版本については未調査であるが, 東京国立博
物館蔵本には, 「田中芳男献納書籍」との記入や「内務
省図書」「農商務省印」「博物館印」「帝国博物館印」と
いった蔵書印があり, また, 楮やトコロアオイなどの植
物図には, 学名らしき欧文が筆記体で丁寧にペン書きさ
れている由であり, これらによって, 日本の近代におけ
る『紙漉重宝記』の役割が知られるとされる(柳橋真氏)。

また, 無窮会図書館神習文庫蔵本は, 目下, 書庫に見
当たらず, 戦時中に流出したも知れないとされる(同図
書館談)。

[2] 文政7年(1824)版

この版は, 寛政10年版の重版らしい。21丁オモテに文
政7年刊行の刊記を補足している。

○国立国会図書館白井文庫蔵本

○国立公文書館内閣文庫蔵本

○島根大学桑原文庫蔵本

以上の版本の内, ここでは次に言及しよう。

○国立国会図書館白井文庫蔵本

外題は, 原題簽に「紙漉重寶記 全」(左肩, 双郭)
とある。図書番号, 特1/3415, 1冊(装丁等について
は先に大同)。柱刻は「○紙漉 (丁数)」とあり, 魚
尾はない。本文は縦書きの漢字・平仮名交り文。画はあるが彩色はない。寸法, 半紙本, 縦22.3センチ, 横15.5
センチ, 題簽匡郭, 縦15.7センチ, 横2.8センチ, 本文

匡郭・四周単郭, 縦18.0センチ, 横12.6センチ。縹色の
原表紙。紙数, 本文19.5丁(「自序」・「譜言」の各1
丁を含む), 刊記1丁分(相当)。蔵書印につき, 第1丁
オモテに, 「白井氏蔵書」(長方形朱印), 「雑」(勾玉形
朱印), 「引馬文庫」(長方形朱印, 20丁ウラ左下にも押
印), 「帝国／図書／館蔵」(方形朱印), 「購入・昭和十
七・十・五・／帝図」(円形朱印), と見える。

刊記

「
 国東治兵衛選 [印形]
 靖中菴桃溪画 [印形]

寛政十戊午四月吉旦

大野木市兵衛

浪華書林

海部屋勘兵衛

(以上, 20丁ウラ, 単郭あり)

文政七甲申年二月補刻

日本橋南壹丁目

江都 須原屋茂兵衛

心齋橋通安堂寺町

大坂 秋田屋太右衛門

(以上, 21丁オモテ, 複郭〈一部単郭〉あり)

第21丁オモテは, 後表紙のウラ(見返し)に当たる。

「國東」「靖中菴」の印形は陰刻である。

刊記の内, 「寛政」の「政」字の第4画の先端に見え
る点については, 先の国立国会図書館蔵の寛政10年版に
同じである。また, 「文政」の条の「月補」2ケ字の左
傍に, 「江都」2ケ字の左傍から下方に, 「須原屋茂」4
ケ字の左傍に, 「心齋」2ケ字の左傍に, 「坂」字の末筆
の先辺りに, それぞれ薄黒い汚れが見える。版木によっ
て刷り出されてきたものであり, これらは, 次の国立公
文書館内閣文庫蔵本や島根大学桑原文庫蔵本においても
同様である。

○国立公文書館内閣文庫蔵本

表紙, 外題, 寸法, 丁数, 刊記については, 国立国会
図書館白井文庫蔵本と同じである。表紙のラベルに「内
閣文庫／番号 和11313／冊数 1(1)／函号 183/
639」とある。表紙には, また, 古いラベルも貼付され
たままで, これらには「農商務省／図書 第八五号／共
巻冊」, 「太政官文庫／和書門／一一三一三号／一冊」, 「内
閣文庫／和書／一一三一三号／一八三函一四架」(以上
は横書きの文字を左から右へ書く), 「事／第一列ノ第甲
區」(縦書き)との文字が見え, 多くは塗消され, 消印
されている。

第1丁オモテに, 「農商／務省／図書」(朱方印, 但し,
「消印」あり), 「太政官／文庫」(朱方印, 20丁ウラに

も)、「膝□信印」(朱方印、篆書、陰刻、左回り、但し、「消印」あり)がある。

第21丁オモテに文政七年の刊記があり、このウラ面の右下に小さな黒印や「カト」・「ハト」、その他の文言が見える。あるいは、書肆の手になる符丁の類であろうか。

○ 島根大学桑原文庫蔵本

外題は、原題簽に「紙漉重寶記 全」(左肩、双郭)とある。図書番号、585 Ko 54、登録番号、36346。1冊。柱刻は「○紙漉 (丁数)」とあり、魚尾はない。本文は縦書きの漢字・平仮名交り文。画はあるが彩色はない。寸法、半紙本、縦22.2センチ、横15.5センチ。本文匡郭・四周単郭、縦18.3センチ、横12.5センチ。縹色の原表紙。紙数、本文19.5丁(「自序」・「譜言」の各1丁を含む)、刊記1丁分(相当)。書き入れ、有。1丁オモテに「桑原文庫」「望月家蔵」の長方形朱印、「島根／大学／図書印」の方形朱印がある。

刊記

「 國東治兵衛選 [印形]
靖中菴桃溪画 [印形]
寛政十^{戊午}四月吉日
大野木市兵衛
浪華書林
海部屋勘兵衛
(以上、20丁ウラ、単郭あり)
文政七^{甲申}年二月補刻
日本橋南壹丁目
江都 須原屋茂兵衛
心齋橋通安堂寺町
大坂 秋田屋太右衛門
(以上、21丁オモテ、複郭・単郭あり)」

「國東」「靖中菴」の印形は陰刻である。

この所蔵本には、前表紙の裏に次のような墨書の書き入れがある(冒頭部に行数を示す)。

「1 この書は石見人の著と思はる さは是
2 最終に石見高角でふ事を出せると 皮を
3 剥く圖の詞書に石見とあるによりてなり
4 紙すきのしわざそかけておもふ
5 にもたハやすからぬこれの一はき
6 かの書の主の望月重熙にかはりて
7 をりたつ田子の元衛かいふ 」

この内、3行目の「石見とあるに」の一句は「よりてな」の文字の右傍に細字で位置し、挿入符号で右のように補入して読めと指示されている。「石見高角」は本書の19丁ウラに見え、「皮を剥く圖の詞書に石見とある」

とは7丁オモテをいう。4行目の「おも」二字は、重ね書きと虫損で正確に判読できないが、やはり、これでよいかと思う。6行目の「かの書の主」は、「この」とありたい(「か」は遠称の指示代名詞)。「望月重熙」とは、蔵書印「望月家蔵」に関わりある人物であろうが、未調査である。7行目の「元衛」とは人名であろうか、あるいは、その略称であろうか。「をりたつ田子の元衛」とは、田舎で文人生活でもしているような教養人が、自らを農夫に仮託したような言い方である。

[3] 文政8年(1825)版

○ 東京都立中央図書館加賀文庫蔵本

この一本の書誌は、次のとおりである。

外題は、原題簽に「紙漉重寶記 全」(左肩、双郭)との外題がある。図書番号は加賀文庫3512。1冊。柱刻は「○紙漉 (丁数)」とあり、魚尾はない。本文は縦書きの漢字・平仮名交り文。画はあるが彩色はない。寸法、半紙本、縦22.4センチ、横15.5センチ、題簽匡郭、縦15.8センチ、横2.8センチ、本文匡郭・四周単郭、縦18.0センチ、横12.6センチ。縹色の原表紙。紙数、本文19.5丁(「自序」・「譜言」の各1丁を含む)、前表紙見返し0.5丁、刊記1丁分(相当)。1丁オモテ、2丁ウラ、3丁オモテなどに片仮名・漢字が書き込まれ、5丁ウラの挿画には、楮の木に黄色く着色されているが、これらは手すざびらしい。蔵書印につき、2丁オモテに「加賀文庫」(朱印、郭なし)、「東京都立／日比谷図書館／館蔵書印」(方形朱印)、前表紙見返し上部に「東京都立日比谷図書館／昭28、1、10和／102680」(楕円形黒印)とある。

前表紙見返しには、単郭の中に、「挿花初心傳 全部四冊」(4行書き)と「生花千筋麗 全部三冊」(同)との2書の宣伝文が掲げられており、末尾に次の一文が位置している。

「大阪書肆 秋田屋太右衛門蔵板」

次の第1丁(「自序」)から第20丁までは、これまでの寛政10年版、文政7年版と同一版と判断される。第21丁オモテ、即ち、後表紙のウラ(見返し)には、双郭をもって「山水徴 雲室上人縮図 全一冊」(延べ4行書き)の宣伝文と、次のような刊記とが印刷されている(二者は一線で隔てられている)。

刊記

「 江戸日本橋通南壹丁目
文政八乙酉年仲爇 須原屋茂兵衛
全浅草茅町二丁目
須原屋伊八
書林 京都寺町松原下ル

勝村治右エ門
 大阪心^(マ) 芥橋安堂寺町南
 秋田屋太右エ門

(以上、21丁オモテの左半面、双郭あり) 文政7年版の第21丁オモテは、右のように全面的に改刻されている。

なお、広告に見える出版物は、共に初心者用のものである。この著者について触れておこう。

『插花初心傳』全4冊は、華道家森在久(瀬丸齋一可)の著になり、天保7年(1836年)の版本が東京大学、京都植物園大森文庫、岩国市立岩国図書館、池坊華道文庫、村野文庫に所蔵されている。彼の生没年は未詳であるが、著書『生花葦の芽』が寛政6年(1794年)に刊行されている。なお、右の広告では、書名の右に「古流池之坊／東山青山／遠州正風」諸流合傳」とある。

『生花千筋麓』全3冊は、江戸時代中期の華道家入江玉蟾の著で、明和4年(1767年)自序、同5年の刊行になる。右の広告では、書名の右に「東都醉花齋宗匠／初学生方」とある。早稲田大学、金沢市などに写本が、また、東京大学、東北大学狩野文庫、京都植物園大森文庫、日比谷図書館加賀文庫、池坊華道文庫等に同5年の版本が所蔵されている。

『山水徴』1冊は、画家雲室(文政10年<1827年>3月9日没、75歳)^(註)の著になる唐画の手引き書である。右の宣伝文に、「此書ハ唐畫ヲ學ブ人ノ爲ニ明ノ世ニハ唐伯虎文徴明董其昌ノ初メトシ又清朝ニテハ王鼎錢席孫師昌ナンド云ル名人ヲ先トシ其餘明清ノ兩朝諸名家ノ畫キ置シ山水圖眞跡ノ中ニテ初学ノ人畫ヲ成スニ手本トナルノベキヲ縮圖セラレシ小冊ナレバ畫ヲ好ム君子ハ必坐右ニ置ベキ書也」とある。嘉永2年(1849年)の版本が玉川大学に所蔵されている。

これらの広告は、いわゆる「予題目録」であり、文政8年当時、まだ、出版されていなかったのではなかろうか。『生花千筋麓』も、『木版挿絵本年代順目録』(漆山又四郎著)の明和5年の条には、「抛入千筋の麓」「五巻<墨付六十六丁>」「板元西村源六」と見える。

(注)『近世人名録集成』、第3巻(森銑三・中島洋次編著、1976年<昭和51年>4月、勉誠社刊)所収、『続諸家人物志』下、688頁。

[4] 刊行年不明の版本

○鳥根県立図書館蔵本

本書の外題は、鼠色の原表紙に「紙漉重寶記 全」(原題簽、黄緑、左肩、双郭)とある。図書番号、貴095、8/2へ、登録番号、189597、バーコード91075339-7。1冊。柱刻「○紙漉 (丁数)」。寸法、半紙本、縦22.7セン

チ、横15.6センチ、題簽は縦16.1センチ、横3.3センチ。本文は四周単郭、縦18.0センチ、横12.6センチ。本文紙数20丁、内刊記半丁。帙あり。補修を経ている。第20丁(丁付け「二十畢」)の1丁を欠いた時期があったらしく、今、この部分(一枚)は、和紙にコピーしたもので補足されている。従って、この20丁ウラに寛政10年とは見えるものの、この版本が寛政10年、文政7年等、いずれの版本であるのか、明確にしがたい。第17丁ウラの左下隅、第19丁の版芯の下端部などにも欠失があり、やはり、コピーした紙片で補修されている。

前表紙の次に差し込み1丁がある。糊付けされていて読みにくい。このオモテに次の墨書がある。「大日本帝国山陰道嶋根縣／石見国美濃郡直地村／ 第三百十一□□ / 永田重郎治物」

「嶋」「根」二字の山偏・木偏は、左傍でなく傍の上部に位置する。「直地村」は、今の鹿足郡津和野町の一部である。ウラの左下隅に「寄贈／昭和51年5月／勝部淳氏」とある。帙(黒布張り)にも同じくあるから、帙ごと寄贈されたのであろう。このウラの右下、本来の第1丁右下隅、第19丁ウラ左下隅(郭外)に旧蔵者印があり、補足の第20丁ウラ左下隅に「しまね／県立／図書館」(リンゴ形の朱印)がある。

『紙漉重寶記』の版本については、以上のような。延18点とは、決して多い方ではなく、いずれも貴重な版本であること、言うまでもない。

複製本

寛政10年、文政7年の版本は、その後、下記の形で複製・刊行されている。

[A]『紙漉重寶記 全』、1925年(大正14年)、製紙印刷研鑽会発行。

本書の外題は、「紙漉重寶記 全」(原題簽、左肩、双郭)とある。寛政10年版本を、できるだけ原装に近い形で複製する。従って、表紙(縹色)、題簽、寸法(縦23.0センチ、横15.7センチ、題簽は縦17.0センチ、横3.9センチ、題簽の匡郭は縦16.0センチ、横2.9センチ)。「自序」から「寛政」の刊記までの丁数(和装20丁)、柱刻などは同版本に同様であり、料紙に石州半紙を用いる。但し、前表紙の次に、新たに1丁を加えて内題とし(和紙、裏は白)、末尾に、和紙・活字による堀越寿助の「跋」(1丁)や「國東治兵衛翁の傳」(1丁)、「柿本人麻呂の傳」(半丁)、「柿本人麻呂事蹟考」(1丁、ウラ半丁は白)を加え、また、図版5枚(洋紙、裏は白)、刊記半丁を加える。

新たな内題には「紙漉重寶記 全」(新1丁オ中央)

とある。また、このページの右肩に「國東治兵衛撰」、左下に「製紙印刷研鑽會／叢書第壹卷」（双行）とある。

図版は、「柿本神社の社殿」「柿本神社の全景」「國東治兵衛翁之舊宅」「國東治兵衛翁之墓」「國東治兵衛翁頌德碑」である（白黒写真）。

新たな刊記には、次のようにある（原本は縦書き）。

「大正十四年六月廿七日印刷

大正十四年六月三十日發行 定價金壹圓

編者 堀越壽助

東京府下蒲田町

印刷者 三省堂

大阪市北區善源寺町四丁目

王子製紙株式會社都島工場内

發行所 製紙印刷研鑽會

この刊記の裏ページの中央には、発行者「製紙印刷研鑽會」の朱印が捺されている。「堀越壽助」とは、当時、王子製紙株式會社都島工場長取締役の任にあり、製紙印刷研鑽會長をしていた。彼は、「紙漉重寶記」は「蓋し和紙の製法を伝へたる稀代の珍本なり。」と評している。

この「製紙印刷研鑽會」（大正14年）の複製本については、次の所蔵本を調査した。

○ 益田市立歴史民俗資料館蔵本

次の所蔵本と同じものである。但し、末尾の図版の順序は、「柿本神社の社殿」「柿本神社の全景」「國東治兵衛翁之舊宅」「國東治兵衛翁之墓」「國東治兵衛翁頌德碑」となっている（白黒写真）。

○ 島根県立図書館蔵本

図書番号、貴095、8/2、登録番号（旧）13770、大正14年8月3日登録。バーコード、91075336-0。外題「紙漉重寶記」、薄緑色の原表紙、「堀越壽助君寄贈」の朱印（人名部5字は墨筆）、「松江／市図／書館」朱蔵書印（方形）あり。末尾の図版の順序は、「柿本神社の全景」「柿本神社の社殿」「國東治兵衛翁之墓」「國東治兵衛翁頌德碑」「國東治兵衛翁之舊宅」となっている（白黒写真）。

○ 益田市立益田図書館蔵本

資料番号、110287687、内題の裏に「益田市立益田図書館／昭和44.5.30／14842」との受入れ印（楕円形）がある。上記島根県立図書館蔵本に同一書であるが、表紙見返しに、「贈呈 製紙印刷研鑽會長／堀越壽助 囀（朱方印「梅／東」）／安田村役場御中」（大正乙丑七月）とあり、大正14年の当複製本発行直後に、堀越壽助氏から安田村に贈られた一本と知られる。「益田市立／益田図書館／館蔵書印」（朱方印）あり。

○ 玉川大学図書館蔵本

図書番号、W585カ（また、前表紙の次の遊紙の左上

隅に鉛筆書きで「資 松崎 IW-147」とも）。ねずみ色様の原表紙・題簽に外題が「紙漉重寶記 全」とある（双郭、左肩）。寸法は縦23.0センチ、横15.8センチ。今、厚紙を付して全体を保護するが、これにも「紙漉重寶記 全」との題簽（双郭、左肩）がある。この他、末尾の図版の順など、島根県立図書館蔵本に同じであるが、なぜか、第1丁の丁付を持つ「自序」が「柿本人麻呂事蹟考」（1丁半相当）の次に綴じられている。乱丁であろう。蔵書印につき、1丁オモテに小さく「竹内」（円形朱印）、首の遊紙ウラ中央に「玉川／学園／図書」（方形朱印）、2丁オモテ右袖下に「玉川図書」（長丸形朱印）などがある。

〔B〕『一壺亭茶話と紙漉重寶記』所収、「紙漉重寶記 全」、1943年（昭和18年）3月、紙業出版社・西嶋東洲発行。

本書の外題（書題）は「一壺亭茶話と紙漉重寶記」（表紙中央、原題簽、双郭）とある。複製本であるが、戦時下であったせいであろうか、全体はザラ紙様の洋紙を用いた1冊本である。

この本体部は、右の大正14年の堀越壽助編・製紙印刷研鑽會発行の複製そのものであり、その堀越の「跋」の末尾余白に「本書発行に際して」と題する「昭和十七年十月 西嶋東洲」の発行の記事（7行）が位置する。

本体部（紙漉重寶記）は石州半紙各1丁を袋綴とするが、「國東治兵衛翁の傳」以下のページは単葉で表裏が印刷されている。

図版の順序は、「柿本神社の社殿」「國東治兵衛翁之舊宅」「國東治兵衛翁頌德碑」「柿本神社の全景」「國東治兵衛翁之墓」となっている（白黒写真）。

右に続き、次の一書が収められている。

「明治五年壬申八月出版

〔世上／有益〕一壺亭茶話 全

浪華 近藤楮作編述

冒頭に、「載するところ、茶、紙、楮草の三類に涉り詳細を極む。」と前書きされている。

この一書も、洋紙、単葉、表裏に活字印刷されているが、ページ数は改められている（17ページまで）。

刊記には、「昭和十八年三月二十五日發行」「編集兼／發行人 大阪市東區北國分寺町九六〇 西嶋東洲」「發行所 大阪市東區北國分寺町九六〇 株式會社 紙業出版社」「出分協承認 ア210033號／3000部」、その他の記事が見えている。西嶋東洲氏には、『通俗紙業発達史』（1926年、紙業新聞社）、『日本紙業発達史』（1942年、同）、『大阪紙業沿革史』（1942年、大阪紙商同業組合）などの著述がある。

この複製本については、下記を調査した。

○ 島根県立図書館蔵本

図書番号、貴095、8/2ハ、バーコード91075337-9。淡茶色表紙で、発行年月日の下に「(定價貳圓)」とある。上記の記述は、実はこの所蔵本による。「しまね／県立／図書館」(リンゴ形の朱印)の蔵書印がある。

なお、紙業出版社からの本複製本は、昭和17年10月にも出版されている(『思文閣〈古書／資料〉目録』、第165号、1999年12月、188頁、また、柳橋真氏・加藤安雄氏)。また、これらの複製時には、「淡茶色表紙本(定価二円)淡青色本(定価一円)」の二様が出され、共に石州半紙が使用されたという(加藤安雄氏)。

[C]『紙漉重宝記 全』、1972年(昭和47年)10月30日、紙の博物館発行。2冊本、限定500冊。

寛政10年版を複製した1冊と、これを活字翻刻した1冊との2冊が公刊された。

複製本の方は、造本、用紙(石州半紙)、柱刻、丁数等、寛政10年版を模す。本書復刻の次第、また、活字翻刻の一冊については後述する。

複製本の方につき、調査できたのは次である。

○ 島根県立図書館蔵本

図書番号、貴095、8/2ニ、登録番号、159293、バーコード、91075338-8。外題「紙漉重宝記」(薄緑色の原表紙、黄(黄緑)色の原題簽、左肩、双郭)、1冊。寸法、縦22.7センチ、横15.8センチ、題簽匡郭、縦15.6センチ、横2.8センチ、本文匡郭、四周単郭、縦18.0センチ、横12.55センチ。限定冊番号、369。同図書館の蔵書印がある。

○ 益田市立益田図書館蔵本

資料番号、110267879、旧図書番号、090/1261/1。原表紙(色共)以下、上記の島根県立図書館蔵本に同じであるが、複製本と活字翻刻本との2冊は書函(下記架蔵本に同じ)に納められ、また、複製本には袋紙(文字なし)が付されている。表紙見返しに、「益田市立益田図書館／昭和48.4.19 /18617/1」の朱印(楕円形)、「益田市立／益田図書／館蔵書印」(朱方印)がある。限定冊番号、354。

○ 架蔵本

図書番号、2354。外題、その他、島根県立図書館蔵本に同様であるが、書函(縦23.15センチ、横15.9センチ、厚1.0センチ)を有する。函の表に「紙漉重宝記全」の文字を複製し、また、背に「紙漉重宝記 全」と印刷する。限定冊番号、493。

[D]『和紙稀観文献集』所収、「紙漉重宝記 全」1975年(昭和50年)12月24日、『和紙稀観文献集』と

して、次のような全4巻別冊1巻が復刻・刊行された。500部限定。監修者寿岳文章、発行所光彩社(京都市)。

「紙漉重宝記」

「[世／上／有益] 一壺亭茶話」

「新撰紙鑑」

「[改／正] 諸國紙名録」

「和紙関係文献目録」(別冊)

別冊はフランク・ホーレー氏蒐集のそれである。

ここに収める「紙漉重宝記」1冊は、寛政10年の版の複製である。全20丁で、表紙以下の造本・体裁は次のようである。

判型 半紙版 縦22.8センチ、横15.6センチ

本文紙 石州半紙、楮100パーセント

表紙 石州草木染 青色

表紙の芯紙 石州太箆和紙

題簽紙 石州草木染 黄色

袋紙 石州太箆和紙

用紙製造者 石州半紙技術者会・久保田安一

元版における巻首や巻尾の蔵書印・墨書等はそのままの朱・墨で複製・印刷されており、その内に、「紙方役所」(前表紙裏に墨筆で大書)、同所の丸い黒印、「光吉識」(長方形朱印)、「若林」(長方形朱印)などに見える。

「紙方役所」とは、江戸時代に諸藩の設けた紙専売に関する役所の一つで、例えば、「高知藩では正徳四年(1714年)以来、紙方役所によって御蔵紙の独占が実施され」といい(『国史大辞典』、第3巻、579頁、吉川弘文館、同藩では、宝暦2年〈1752年〉に国産方役所が新設されて平紙の独占も行われた)、伊予の西条藩では、江戸後期、文政年間(1818年～1830年)頃に楮役所と紙方役所が設けられ(同、第1巻、810頁、第5巻、423頁)、また、同吉田藩にも紙方役所が置かれたという(同、第1巻、816頁)。ここの「紙方役所」が、それらのいずれに相当するかは未勘であるが、『紙漉重宝記』がそうした役所や会所等に備え付けられていたとは甚だ興味深い。容易に推測されることではあろうが、この元版(寛政10年版)の墨書によって初めてそれが裏付けられるのである。なお、「若林」とは、和紙研究家若林正治氏の蔵書印であろうか。

この複製本につき、調査できたのは次である。

○ 島根県立図書館蔵本

図書番号、S095、8/41、バーコード、91275979-2。限定冊番号「第三四一号」(朱書)。残念ながら、今、袋紙を紛失している。

[E]『江戸科学古典叢書 5』に所収、「紙漉重宝記 全」、1976年(昭和51年)8月5日、恒和出

版刊。

「紙漉大概」「紙譜」と共に収められている。久米康生解説。寛政10年版を複製する。また、本文を活字に起こし、語注を付しているが、振り仮名は現代仮名遣いとなっている。A 5判。

[F]『近世歴史資料集成 第Ⅱ期』の『第Ⅲ巻 日本産業史資料(3) 農業及農産製造』所収、「紙漉重寶記 全」、1991年(平成3年)10月25日、発行所科学書院(東京)、発売元霞ヶ関出版株式会社。

「養蚕秘録」「綿甫(圃)要努」「綿花培養新論」「機織彙編」「製茶図解」「朝鮮人参耕作記」「椎茸製造独按内」「製葛録」「砂糖製作記」と共に収められている。「原本」として文政7年版の国立公文書館内閣文庫蔵本(183-649)を複製し、これに「解説文」(活字)を付す。変体仮名は全て平仮名とし、句読点を付す。B 5判。

以上、『紙漉重寶記』の複製本について述べた。この他にも、(a)大日本印刷会社の出した方一寸内外の彩色豆本に複製したもの(昭和20年代)、(b)紙商相馬屋(東京牛込)の出した縮刷版(著者名不記)があるとされるが(浜田等太郎「紙漉重寶記の欧米版」、『学燈』、1952年(昭和27年)、5月号)、未調査である。

活字翻刻

版本を活字翻刻したものに下記がある。

[A]『日本科学古典全書』、第11巻・「産業技術篇・農業・製造業・漁業」所収「紙漉重寶記 全」

この『全書』は、「日本の科学技術史研究に必須の文献の集成を企画した叢書」(『国史大辞典』、第11巻、120頁、吉川弘文館刊)とされる。狩野亨吉・小倉金之助・桑木或雄・新村出監修、三枝博音編纂、朝日新聞社刊。当初、12巻12冊に索引・文献・年表の別刊1冊を加えた全13冊(後15巻案となる)の予定で、1942年(昭和17年)3月から逐次刊行されたが、1949年(同24年)5月、10冊をもって途絶した。

この10冊は、1978年(昭和53年)、朝日新聞社より覆刻・刊行された(吉田光邦解説)。この折、元版の欠陥等が補正され、また、元版刊行時の月報等の資料がまとめられ、別刊として添付されている。

[B]『紙漉重寶記』、1972年(昭和47年)、紙の博物館刊行。前述の2冊本の内の翻刻の1冊。限定500冊。

寛政10年の版を底本とし、これを活字に翻刻したものである。やや厚手の白い洋紙に、丁数、各丁の行取り、漢字の付訓など、できるだけ底本に忠実に翻刻してあり、

挿画の部分は、そのまま複写されている。現今、最も優秀な翻刻書といってよい。但し、漢字は新字体を用い、製本は袋綴でなく、単葉の表裏に印刷されている。末尾に、「財団法人 紙の博物館／館長佐藤秀太郎記」による次のような内容からなる「あとがき」(縦書き、8ページ)が付されている。

「紙漉重寶記」復刊について

活字化現代版について

岩見方言の註解について

また、刊記には、次のように見える。

「昭和四十七年十月三十日 復刻

東京都北区堀船一ノノ八

財団法人 紙の博物館

用紙製造 和紙 石州半紙技術者会

用紙寄贈 洋紙 特殊製紙株式会社

同 題簽 京都森田和紙

印刷製本 東京 株式会社文明堂印刷

ここに見える石州半紙は、先の複製本の方に用いられている。

この翻刻本は、次のように保存されている。

○ 島根県立図書館蔵本

図書番号、貴095、8/2ホ、登録番号、159293、バーコード91005997-3。限定冊番号369。

○ 益田市立益田図書館蔵本

資料番号、110267879、旧図書番号、090/1261/2。

首の遊紙裏に、「益田市立益田図書館／昭和48.4.19/18617/2」の朱印(楕円形)、「益田市立／益田図書／館蔵書印」(朱方印)がある。限定冊番号、354。複製本と共に書函に納める。

○ 架蔵本

図書番号、2355。限定冊番号、493。

[C]『日本農書全集 第五十三巻』所収、「紙漉重寶記 全」、1998年12月25日(第1刷)、社団法人

農山漁村文化協会発行。

「農産加工4」として、「績麻録」「塗物伝書」「紀州熊炭焼法一条并山産物類見聞之成行奉申上候書附」「[実地／新験]生糸製方指南」「樟脳製造法」と共に収められている。柳橋真解題。A 5判。上段に寛政10年版の国立国会図書館所蔵本(106/合 1/221)を翻刻し、下段に現代語訳を行う。まま語句の注を施し、元版の挿画は縮小してそのまま転載している。「解題」は誠実で丁寧であるが、国東治兵衛の生没年・経歴、挿画の丹羽桃溪の実績などにつき、補筆を要する部分がありそうである。

[D]『日本庶民生活史料集成 第十巻』所収、「紙漉重寶記 全」、1970年5月15日、三一書房刊行。

この『集成』は、江戸時代から明治時代前期までの庶民生活の諸層に関する史料を収集し、探検・紀行・地誌、漂流、一揆、飢饉・悪疫、見聞記、風俗、農山漁村民生活、世相、その他、各項目毎に類聚を行い、全30巻、別刊1冊として刊行されたものである(昭和43年〈1968年〉～59年)。

「紙漉重宝記」(377～392頁)は、その第10巻「農山漁村民生活」の内に収められ(宮本常一・原口虎雄・谷川健一編、839頁、B5判)、活字翻刻・解題は加藤安雄氏による。底本につき、「校訂者加藤安雄氏所蔵の堀越本を底本とし、「紙の博物館」所蔵の寛政版を参考とした。」(6頁)とある。翻刻とはいえ、校訂の過程が示されず、丁数、行数など底本の行取りは顧慮されていない。句読点を施し、振り仮名は多く省かれている。挿画は、後にまとめて、1ページに4丁ずつ縮小して掲出されている。

謄写版による翻刻

○ 『紙漉重宝記』、1932年(昭和7年)、山崎慧氏が謄写され、石見国語会員へ配布された油印本。

山崎慧氏(当時、島根県的那賀下府村小学校長、後、島根県立益田高等実業女学校長)が、昭和7年5月頃、大島幾太郎氏(浜田町郷土史家)所蔵の再版本(文政7年版本)をもって手写・謄写し、郷土資料の一端に資するため、石見国語(同攻会)会員に20部ばかり配布したものの。但し、後半は未完。

石見国語(同攻会)の主催者は、岩井肅吉氏(当時、那賀郡長浜村小学校訓導、後、浜田中学校教諭)。(矢富熊一郎著『国東治兵衛翁之治蹟』、50頁による)

○ 『紙漉重宝記』、1951年(昭和26年)、島根県秘書課にて謄写、作成された油印本。

25部作成された内の1部が、島根県立図書館に保存されている。図書番号、095、8/2口、バーコード91099744-5、旧番号、446101、昭和26年4月11日登録。

半紙二つ折本(袋綴)の和装本、全19丁。文政7年版をもって手書き翻刻し、挿画を模している。1丁オモテの右上端に「万波先生恵存」、この下端に「田村[朱印]」とあり、左側に内題(単郭)を置く。1丁ウラ左下に「万波教氏寄贈」と記され、また、「島根県立図書館」の瓢箪形朱印がある。

19丁ウラの上段に、文政7年版本に見られる刊記が縮写(油印)されており、下段に次のように見える。

「右大正十三年十一月廿二日美濃郡高津町
中島修蔵本二依り謄写ス
島根県史編纂掛

昭和廿六年二月末、県文書庫蔵謄本によつて、廿五部複製したものであるが、現代字体への置替えに魯魚の誤りなきを保しがたい。

島根県秘書課

田村囑託

(右は、本文同様の油印。縦書き)

県の写本は原本の振かなを省略したもののようである。

文政補刻は発行書店の変化による二十一丁オの補刻のみのようである。◎(丸いサイン)

(右の4行は赤いペン書き)

右の趣旨をたどれば、次のようになる。即ち、大正13年(1924年)11月22日に島根県史編纂掛は「中島修蔵本」、即ち、文政7年版本を謄写した。この「謄写」とは手筆による模写で、振り仮名は省いたものらしい。また、この時期に謄写本を作成したのは、美濃郡安田村で国東治兵衛顕彰の機運が盛り上がり、同年9月、「石見蘭庭開祖 治兵衛翁頌徳碑」等が建立されたからであろう。

その後、右の謄写本は、県文書庫に保管されていたようだが、昭和26年(1951年)、秘書課によって現代字体へ翻字され、鉄筆による謄写版印刷に付された(25部作成)。

後表紙のウラに「紙漉重宝記の複製について(26・3・1)(秘書課 田村清三郎)」との標題のもとに、その謄写版印刷時の注意事項や配慮等を記した(油印)A5判位のザラ紙が添付されており、末尾には、本書作成については「加藤(義成)囑託」「金津主事」を煩わしたともある。

「田村清三郎」(1914年～1968年〈大正3年～昭和43年〉)とは、「昭和26年(1951年)12月20日」現在の『島根県職員録』によれば、弘報文書課囑託、また、加藤義成氏(1905年～1983年〈明治38年～昭和58年〉)は秘書課囑託と記載されている。金津主事とは、弘報文書課の事務吏員三級として挙がっている金津弘氏のことであろうか。(「昭和25年1月1日」現在の同『職員録』には、田村氏、加藤氏の名が見出せず、金津弘氏は、文書係囑託〈技術吏員〉と見える。)

この謄写本1点は、昭和26年春(3月)、田村氏から万波教氏へ寄贈され、同4月、万波氏から島根県立図書館に寄贈されたことになる。

手写本

○ 石見蘭庭同業組合蔵写本・福原克己氏蔵写本
1924年(大正13年)8月成

柿本神社（益田市高津町高津川左岸に位置する）に所蔵されていた東京市男爵安場家秘蔵本を、同蘭筵同業組合の委嘱を受けた福原美知重氏（当時、安田村役場書記）が半年をかけて手写した浄写本である。堀越寿助氏の再版本（複製本）に先立つこと1年のことであり、石見蘭筵同業組合に保存されたという。（矢富熊一郎著『国東治兵衛翁之治蹟』、50頁による）

柿本神社所蔵の版本（安場家蔵本）については未調査であるが、柿本人麻呂と『紙漉重宝記』との関わりは深いから、同神社に本書の版本が所蔵されていても不思議でない。

石見蘭筵同業組合は、現在は存在せず、そこに所蔵された福原美知重氏手写本の行方は不明である。ところが、同様の手写本1本が、福原美知重氏の子息福原克己氏（既出）のもとに所蔵されている。半紙二つ折本で、装丁、行取り、字形等はもとより、挿画の筆遣いなど、寛政10年版本を透き写しにしたかのような模写本である。ただ、本文に付された振り仮名は、省略されている。後表紙の見返しに、「東京市／男爵安場家秘蔵写（ママ）／高津人丸神社所蔵のも／のを借受け写取す／大正十三年八月二十日／福原美知重」と墨書されている。これは、美知重氏の肉筆で、当時、22～23歳のことであったかとされる。

祖本、書写時、書写者などからすれば、石見蘭筵同業組合に納めたという手写本は、まさしく当本かと思われる。当本は、同組合から、再び、美知重氏のもとに帰ったものであろうか。あるいは、美知重氏は、その折、手写本2本を作成されたのであろうか。

なお、大正13年9月という時期は、「美濃郡安田村」自身においても、また、同村が、他に及ぼした影響においても、格別なものであった。福原美知重氏による手写本の作成も、「石見蘭筵開祖 治兵衛翁頌徳碑」、「石見蘭筵組合創立者 好五郎氏碑」といった顕彰碑建立の機運と密接に関わっている。

以上には、『紙漉重宝記』の版本、また、複製本、活字本、謄写・油印本、手写本について述べた。『紙漉重宝記』は、18世紀末における「日本の紙漉き」を記録・紹介した文献であるが、同時に、他ならぬ島根県・石見国の製紙技術を書き留めた貴重な郷土資料でもある。謄写・油印本、手写本の存在は、本県における本書に対する格別の思いを物語るものであろう。

この他、『紙漉重宝記』については、その寛政10年版本等からその一部（ことに挿画の部分など）を転載、復写、あるいは、翻字した文献がある。

- 寿岳文章著『日本の紙』、1967年（昭和42年）、吉

川弘文館刊。

- 関 義城著『和漢文献類聚 江戸時代編』、1973年（昭和48年）、千代田印刷株式会社、200部、非売品。

- Kiyofusa Narita, “A Life of T'sai Lung and Japanese Paper-Making”, 1980, The Paper Museum.

本書には、ドイツ語版、スペイン語版、フランス語版もあり、また、同趣の抄出本、翻訳本等があるが、これらについては下記の著述に譲る。

- 寿岳文章「外国の和紙文献」、『学燈』、44-2、1940年（昭和15年）
- 浜田徳太郎「紙漉重宝記の欧米版」、『学燈』、1952年（昭和27年）、5月号。
- 加藤安雄、『日本庶民生活史料集成』、第10巻（既出）、「解題」、378頁。
- 前川新一著『和紙文化史年表』、1998年4月、思文閣出版。

3 開板・版元・書肆

開板

『紙漉重宝記』の初版は、寛政10年（1798年）4月、大坂で出版された。

当時、書物の出版には町奉行所の許可を必要とした。即ち、開板人（出版者）は、まず、草稿、または、清書本を添えて仲間行司（江戸は「行事」）に開板を願い出る、行司は、出版条目（享保7年〈1722年〉の取締令）に照らし、重版・類版、板木株（版株、出版権）、その他について検閲・審議する、問題がなければ、願書（開板人と連名）と草稿等を惣年寄（江戸は「町年寄」）へ提出し、町奉行所の許可を受ける、という次第である。

『紙漉重宝記』の開板願は、寛政9年11月に提出された。記録に寄れば、次のようである（原本縦書き。以下同様）。

「 覚

- 一 江村銷夏録 全四冊
- 一 合筆下江草 全壹冊
- 一 四季発句類林抄 全部五冊
- 一 紙漉調法記 全壹冊
- 一 大橋集 全壹冊

〆五品

右之書此度新板仕度願出候処何方へも差構無之書
御座候間板行被為 仰付被下候様御願上可被下
候万一何国何方より差構被申出候ハ、御差図次

第違背申間敷候勿論／願本之通無相違様板行可致候為後日如件

山口屋亦一㊤
 本屋又兵衛㊤
 開板人 塩屋忠兵衛㊤
 藤屋弥兵衛㊤
 秋田屋市兵衛㊤

寛政九巳年十一月

御行司兼中

」

右は、「新板願出印形帳」第8冊（『大坂本屋仲間記録』第14巻，1989年〈平成元年〉3月，大阪府立中之島図書館編，247～248頁）による。文中の／印は底本に改行されている箇所である。

これを承けて，仲間行司は，同9年11月22日，暮早々より四ツ時まで，秋田屋（大野木市兵衛方）において寄合をもち，その5点について審議した。この折の行司は，先の9月20日（翌日御届）に篤組と交替した博組で，出勤したメンバーは，大野木市兵衛，海部屋勤兵衛，秋田屋徳右衛門，藤屋九兵衛，和泉屋卯兵衛の5名，欠勤は塩屋喜助，小刀屋六兵衛，大津屋治郎右衛門の3名であった。

この時の「寄合之覚」は，『出勤帳』（十四番），同年月日の条に収められており，「紙漉調法記」の下方には「願もの，藤九・小六印」と記されている（『大坂本屋仲間記録』第2巻，1976年〈昭和51年〉3月，大阪府立中之島図書館編，66頁）。

仲間行司から惣年寄への願書は，『開板御願書扣』（34冊）として記録・保存されている（「扣」は，控えの意）。大阪府立中之島図書館に所蔵されるその第22冊目によれば，次のように見える。

「 覚
 〈式百廿五丁〉 集者〈清〉高士奇
 一 江村銷夏録 全部四冊
 〈唐本讎刻〉 〈北久太郎町五丁目〉
 開板人 山口屋又一
 〈午二月十三日／本 御免〉
 （中略，出版出願書2点分の記事あり）
 〈長堀清兵衛町〉
 〈十九丁〉 作者 麻屋次兵衛
 一 紙漉重宝記 全巻冊
 〈同断〉 〈安堂寺町五丁目〉
 開板人 秋田屋市兵衛
 （中略，出版出願書1点分の記事あり）
 五品
 右之書行司立会相改候所何方へも差構／無之書二御座

候間板行被為 仰付被下候様／御願上可被下候巳上
 寛政九年

巳十一月

本屋行司

〈安堂寺町五丁目〉
 藤屋九兵衛
 〈津村東之町〉
 小刀屋六兵衛
 〈北久太郎町五丁目〉
 江川庄左衛門殿 開板人 山口屋又一
 金谷与右工門殿 〈高麗橋巷丁目〉
 今井与三右工門殿 藤屋弥兵衛
 江川庄作殿 〈北久太郎町五丁目〉
 塩屋忠兵衛
 〈安堂寺町五丁目〉
 秋田屋市兵衛
 〈博勞町〉
 本屋又兵衛 』

右は，『大坂本屋仲間記録』第17巻（1992年〈平成4年〉3月，大阪府立中之島図書館編，348～349頁）によった。文中の〈 〉印は，底本では，細字で行の右肩・左肩に傍記されている部分である。

本屋行司の代表として名を連ねたのであろうか，藤屋九兵衛と小刀屋六兵衛との名が拳がっている。先の『出勤帳』に「願もの，藤九・小六印」と見えたところが参照される。出願先の惣年寄は，江川庄左衛門，金谷与右衛門，今井与三右衛門，江川庄作である。

これにより，開板の願書は，大坂三郷惣年寄書物方に取次がれ，町奉行に届け出て，正式に許可されることになる。許可は，翌「午二月十三日」に下りた。

印刷・製本後，出来上がりの書物を草稿と共に行司に提出して再検閲を受けると「割印之証書」が下付され，売弘め許可となる。

なお，「紙漉調法記」の「作者 長堀清兵衛町 麻屋次兵衛」とは，当該の国東治兵衛のことである。先に，矢富熊一郎氏が，新出の治兵衛自筆本によって，この住所・屋号・人名を求められたことを知った。ここで，彼此が符合することになる。「調法記」「重宝記」「次兵衛」「治兵衛」といった用語・用字の差異は，当時，ままた，見られることである。

版元・書肆

こうして，『紙漉重宝記』の出版は許可され，寛政10年（1798年）4月，その初版が刊行された。

寛政10年刊本の版元として，次の2人の名が見える。共に，大阪の本屋を支配する仲間行司に選ばれるほどの

人物であった。

大坂 大野木市兵衛

大坂 海部屋勘兵衛

また、文政7年(1824年)の刊本には、「書林」として、次のようにあり、

江戸 日本橋南巷丁目 須原屋茂兵衛

大坂 心齋橋通安堂寺町 秋田屋太右衛門

同8年のそれには、これに加えて、

(江戸) 浅草茅町二丁目 須原屋伊 八

京都寺町松原下ル 勝村治右エ門

の名が見えている。

開板は秋田屋市兵衛(大野木市兵衛)の名で免許され、板木も大野木市兵衛のもとに所有された(『板木総目録株帳』(文化九壬申歳改正)、『大坂本屋仲間記録』、第13巻、545頁)。即ち、本書は、海部屋勘兵衛との相合版ではない。然るに、初版の奥に海部屋の名が見えるのは、販売提携者としての連名ではなからうか。

大野木市兵衛は、また、その後の名を連ねていない。これは、彼は、あくまで版元であり、以後、売出は、須原屋茂兵衛、その他に委ねたからであろう。こうしたケースも、ままだ見られることであるが、その後、間もなく、版木は須原屋茂兵衛に譲渡されたようである。

これらの人物につき、改めて概観すれば次のようである。

[大野木市兵衛]

秋田屋市兵衛(大野木氏、宝文堂)は、享保9年(1724年)10月から明治6年(1873年)12月まで、大坂心齋橋筋安堂寺町南入西側で営業した書肆(出版・販売)である。所在は、大阪安堂寺町五丁目(南久太郎町六丁目、鋳屋町、心齋橋筋通一丁目、南大組第七区心齋橋筋一丁目とも)。元禄11年11月には大坂未公認本や仲間24軒の一つとして見え(井上隆明氏)、延宝2年(1674年)刊行の『二行節用集』の奥に大阪心齋橋筋古本屋市兵衛と見える(井上和雄氏)。「秋田屋」は屋号であろう。例えば、『文林節用筆海往来』延享4年版(玉川大学蔵)の巻末の「蔵版目録」に「寶文堂蔵板豫頭目録〈大坂心齋橋筋安堂寺町／南入西側本屋秋田屋〉大野木市兵衛」、『〈開／化〉童蒙近道』(三次市立図書館蔵、No.238)の刊記に「〈秋田屋〉大野木市兵衛」のように見えている(「秋田屋」は右肩小字)。

所有していた版権は、都を抜いて総計265(大坂180、江戸85)で、各種の節用集、往来物や用文章、蒙求、医書、百人一首や漢詩文の参考書、字書類、その他、庶民の日常生活に用いられるもの、また、基礎的で全集的なものを出版し、売り方が安定していたとされる。

[海部屋勘兵衛]

明和の頃から文化にかけて営業した大坂新町西口小町浜角の書肆とされる(多田氏、定学堂、名は直洪、所在は、大坂小浜町とも)。寛政7年11月から天保3年11月までに34点(内3点取消す)の出版出願・出版がなされている(坂本宗子氏調査)。『合類書籍目録大全』(享和元年)、『群書一覽』(同2年)、『掌中群書一覽』(文化9年)、また、「象棋」、和歌、筆道、文章、料理等の指南書、「新撰姓氏録」等を出版している。『大全童子往来百家通』『増補童子往来百家通』は、出願の後、取消されている。

[須原屋茂兵衛]

万治、元禄の時分から明治にかけて営業した江戸(日本橋南巷丁目)の書物問屋。初代茂兵衛(北島氏、千鍾房〈堂〉、月下軒、明治に松成氏)が紀州有田郡栖原から転任して開店した。元禄以後次第に軌道に乗り、享保頃から宝暦前後に栄えて江戸随一の大手となり、文化、文政期には日本一の大手として君臨するに至った。幕府の職員録とでもいうべき「武鑑」類や「江戸絵図」類の版権を一手に握ったのが特色であるが、当時の多様な出版物(唐本、和本、仏書、石刻等)の奥にその名が見えている。一門は十余軒に及び、江戸出版全体の三割に達したという。明治37年、九代で廃業した。

坂本宗子氏の調査によれば、享保12年3月から文化12年までの89年間に、1,147部の図書を取扱った、その内、自主出版、あるいは、相板で刊行販買した図書は約350部で、残る800部は、主として大坂・京都版元による出版物の販買である、この間に関係した上方の版元は300軒にもものぼる、とされる。

版元秋田屋(大野木)市兵衛の出版書を出した例として、『南方草木状』『尺典通考』『増続 商売往来』『婦人教訓書』『絵本美那の川』『大方宝生節用集』『成肅公碑』『有馬勝景図』『和漢名画苑』『墨竹譜』『風狂文章』『拾玉年代記』『文林節用筆海往来』、『いろは節用集大成』、その他多数がある。

[須原屋伊八]

宝暦・明和から明治にかけて営業した江戸(浅草茅町二丁目)の書肆で、安永元年12月から文化11年12月までの出願記録が残る。初代伊八(北沢氏、青黎閣)は常陸の出で、須原屋茂兵衛の書店に入り、後に下谷池之端仲町に独立した(文化元年〈1804年〉没、72歳)。二代(天保5年〈1834年〉没、62歳)の時、火災に遭って浅草茅町に移転した。明和、安永以来、蘭書の翻訳・出版、及び、兵書の刻本等で大繁昌したが、明治の世となって忽ちに傾き、四代弥助の代に閉店・廃業した(明治20年12

月)。

版元秋田屋(大野木)市兵衛の出版書を出した例として、『手引節用集大全』や『御家庭訓往来』などがある。

[秋田屋太右衛門]

文化から明治にかけて営業した大坂心齋橋通(筋)安堂寺町南入の書肆(田中氏, 宋栄堂)。所在表示に, 大坂車町, 安堂寺町五丁目, 南大組第六区安堂寺町通四丁目第四番, とも見える。宝暦6年7月から明治6年8月まで, 往来物, 塵劫記類, 絵本, 物語など, 43点についての出願記録がある。

なお, 文政8年の刊本には, 「大坂書肆 秋田屋太右衛門蔵板」の名のもとに, 花道と絵画の入門書3点の宣伝文が掲載されている。

[勝村治右エ(衛)門]

寛延から明治にかけて, 京都寺町(通)松原下ルで営業した書肆(文徳堂)。天明5年極月から文化11年8月まで, 和歌, 漢詩文, 年代記などに関する26点についての出願記録がある。『永代節用無尽蔵』は, 当時, よく用いられた「節用集」の一つだが, 天保2年・嘉永2年・文久4年の刊記には, 須原屋茂兵衛と共にその名が見えている。

『紙漉重宝記』の寛政10年版, 文政7年版, 同8年版は, 同一の版本から刷り出したものである。この版本のその後につき, 浜田徳太郎氏は, 次のような話を残されている。

(前略)江戸版の来歴に就ても詳しいことは分らないが, 江戸の須原屋茂兵衛がその版本を譲りうけて原版のまま版行したと伝えられる。この版本は後に須原屋から現在の紙商榅原中村氏に移り, 大正十二年までは同家の土蔵内に保存されていたが, 同年末の震災で惜しくも烏有に帰したという話である。

(「紙漉重宝記の欧米版」, 『学燈』, 1952年〈昭和27年〉, 5月号)

貴重な逸話である。

[参考]

井上和雄編『〈慶重／以来〉書買集覧』, 1916年(大正5年)9月, 彙文堂書店。復刻, 1978年(昭和53年)6月, 言論社。

坂本宗子『〈享保／以後〉板元別書籍目録』, 1982年(昭和57年)4月, 清文堂出版株式会社。出版・販売認可記録の「開板御願書控」(大坂)・「割印帳」(江戸)を踏まえた調査目録である。

藤井隆著『日本書誌学総説』, 1991年(平成3年)4月, 和泉書院。

大阪図書出版業組合編『〈享保／以後〉大阪出版書籍目録』, 1964年(昭和39年)8月, 清文堂出版株式会社。

『(同)』, 復刻版, 1998年(平成10年), 龍溪書屋。

長友千代治「(同書)書肆索引」, 『大阪府立図書館紀要』, 第2号, 1966年(昭和41年)3月。

矢島玄亮著『徳川時代〈出版者／出版物〉集覧』, 1976年(昭和51年)8月, 万葉堂書店。

朝倉治彦・大和博幸編『〈享保／以後〉江戸出版書目新訂版』, 1993年12月, 臨川書店。

井上隆明著『〈改訂／増補〉近世書林板元総覧』(日本書誌学大系76), 1998年(平成10年)2月, 青裳堂書店。

4 挿画絵師

寛政10年(1798年)の出版時, 挿画を担当したのは, 大坂(島之内木挽北之丁)の浮世絵師靖中菴桃溪, 即ち, 丹羽元国であった。字は伯照, 号は靖中菴, 丹桃溪, 桃溪山人とも号した。狂歌をたしなみ, 狂名を遅道という。浮世絵は葩閨月に学び, 狂歌は鉄格子波丸に師事した。もとの家業は大黒屋喜兵衛と称する葉種屋で, 自ら挿画の筆を執った『商人買物独案内』(土橋可教編, 文政2年, 中川五兵衛版)に「心齋橋大丸向ひ大黒屋規兵衛保命丸, 蘇命散, 真珠牛黄丸」と見える。

安永から享和に至る30余年は浮世絵殷賑の時代であり, 続く文化にかけては錦絵が隆盛した時代であった。下河辺拾水, 西川祐信, 鳥居清長, 歌川豊春・豊国, 北尾重政・政演・政美, 喜多川歌麿, その他, 声名を博した画工の中にあって, 靖中菴桃溪も, それなりに名の知られた絵師であつたらしい。

今, 漆山天童著『日本木版挿画本年代順目録』(漆山又四郎著『日本書誌学大系34 絵本年表二』『(同)三』, 1983年〈昭和58年〉9月, 青裳堂書店)により, 彼が絵筆を執った書目を列挙してみよう。

撰津名所図会 9巻12冊 寛政8年4冊・同10年8冊出来, 他の絵師6人と共に執筆(竹原春朝齋の約半数を担当す), 殿為八・外4名版

狂歌粟葉集 1冊 寛政9年 桃溪等画

桐の島台 2巻 寛政9年 9図の内, 桃溪画1図, 流光齋画8図, 八文字屋八左衛門版

〈寛政／改正〉みをつくし 1巻 寛政10年再版, 単独画, 和泉屋卯兵衛版

紙漉重宝記 1冊 寛政10年, 単独画, 大野木市兵衛・海部勘兵衛版

優游一寄 1冊 寛政10年, 25図の内の1図担当, 仙台加志和屋正六彫刻

絵本三韓軍記 12冊 寛政12年, 単独画, 本屋又兵衛版

〈新撰／増益〉都会節用百家通 1巻 享和元年, 単独画, 和泉屋宇兵衛版

河内名所図会 6巻 享和元年, 単独画, 和泉屋宇兵衛版

〈諸国／石話〉雲根志 三編 6巻 享和元年, ほぼ単独画, 高柳平助梓

東臚子 5冊 享和元年, 絵師16人余の内の一人として執筆, 大野木市兵衛・他版

橘菴漫筆(上記の改題) 5巻 享和2年, 絵師16人の内の一人として執筆, 泰文書堂梓

狂歌蘆能角 1冊 文化4年, 単独画, 雌雄軒蔵板

〈狂／歌〉かはころもの記 2冊 文化5年, 鉄格子波丸述, 元巻は中井藍江画, 享巻は桃溪画, 河内屋太助版

〈新／撰〉増歌よしの山 1冊 文化6年, 単独画, 河内屋太助版

農家益 後編 2冊 文化7年, 単独画, 河内屋太助版

絵入毘沙門天王靈驗記 5冊 文化9年, 絵師4人の内の一人として執筆, 近江屋平蔵版

吾妻乃都登 2冊 文化9年, 絵師6人の内の一人として執筆, 扇屋利助版

狂歌浦の見わたし 1冊 文化9年, 単独画, 葉流軒蔵版

狂歌よへの友 1冊 文化9年, 単独画, 蝙蝠軒の友蔵版

本朝名家画譜 1冊 文化11年, 「桃溪先生輯」として大本彩色入, 53図, 31丁半, 単独画, 尾張東壁堂(永楽屋東四郎)発兌

朝鮮珍花薈集 1冊 文化12年, 単独画, 浅田清兵衛版

牽牛品 初・二編 2冊 文政2年, 他1人と共に執筆, 興文堂(鹽屋平助)・他発兌

商人買物独案内 1冊 文政2年, 単独画, 中川五兵衛版

画本道の手引 1冊 文政6年11月, 板元播磨屋本三郎

靖中菴桃溪は、文政5年(1822年)10月15日に63歳で没した(墓所は大阪生玉の円通寺にあり、法号は涛誉松齋禅定門)。この最後の一書は、その一周忌に際し、彼の狂歌を取めた追悼集である。上巻に、故人丹羽桃溪の画27丁、下巻に、弟子菅松峰の画28丁半・口画彩色入を収める。思恩堂非得 大阪・大和屋四良三郎著・序、彫

工大阪寿良軒。

以上は、荒粗の調査で、見落としがあるかも知れない。桃溪の単独画と見える場合でも、他者の筆の混じることがあろう。抱えている幾人かの弟子と共に制作し、時には、師弟いずれの作か判然としないような場合もあったであろう。他方、「画工不明」と記されているものでも当人が関係する場合があるかも知れない。また、没後の出版物でも、彼の描いた挿絵の挿入されたものもある(例えば、文政6年刊行の雨香園柳浪『滑稽磨毛』など)。ともあれ、これらによれば、凡そのことは窺い知れよう。

まず、靖中菴桃溪は、『撰津名所図会』(秋里籬島著)『河内名所図会』(同)といった「名所図会」(地誌)の挿画を描き、精細な大阪庶民の生活を写している。前者は、竹原春朝齋画174丁、春泉画8丁半、丹羽桃溪画98丁、下河辺維恵画3丁半、楠亭画1丁、石田友汀画11丁半、西村中和画1丁と分担執筆し、後者は、単独で執筆したようである。前者の場合、春朝齋の名前だけが表に出たため、その『図会』の画作としての功績が春朝齋一人に帰せられてしまった。しかし、春朝齋は神社仏閣の鳥瞰図のみを担当し、桃溪は庶民生活を写した画面を担当している。より読者の興を引く『図会』の面白さは、むしろ桃溪の功にあるとされる(肥田皓三「絵本」、『近世大阪画壇』、大阪市立美術館編、1983年10月、同朋社出版、222頁)。

これらの『図会』は、師匠の蔀関月が『伊勢参宮名所図会』5巻6冊(寛政9年、鹽屋忠兵衛、外6名)、『山海名産図会』5巻(寛政11年、吉田松林堂、外3名)、『近江名所図会』前編4冊(文化11年、鹽屋忠兵衛、外2名)等を執筆しているところに倣うものでもあろう。既に、巧みな風俗描写力を備えた堅実な地誌版画絵師として、評価の高かったことが知られる。なお、蔀関月は、蔀德基ともいい、字阮二・原二、子温、黄楊齋と号した。寛政9年10月20日没、51歳。画系は、次のようになる。

一蔀 関月 ─ 蔀 関牛
└─ 丹羽桃溪 ─ 松川半山
└─ 菅松 峰 ─ 菅 其翠

『〈新撰／増益〉都会節用百家通』1巻(享和元年)は、「墨付三百六十九丁」という大部の「節用集」である。刊記の初めに「浪速 高蘆屋草創／同 鎌松荷増刪／同 丹羽桃溪畫圖」とある。国語生活諸般に資するための辞書ではあるが、その首部や頭書欄には多種多様の百科辞書の内容を兼ね備え、ために、優れた教養書として江戸・大阪で文化8年、文政2年、天保7年等に補刻・増刷され、広く巷間に流布したようである。こうした方面への執筆は、知識人・文化人としての彼の名を、更に

高めることになったであろう。なお、この『目録』には、「板元〈大坂〉和泉屋宇兵衛」とあり、行間に朱筆で「高蓋屋編 鎌松荷補 大坂 高橋 上田 鳥銅板」(頭書欄「朱、穂積氏ニ／＼よる」)との記入があるが、文化8年次の補刻時には浪華書林として大野木市兵衛の名も見えている。

桃溪は、『絵入毘沙門天王霊験記』5冊(恭道編、文化9年)にも挿絵を描いているが、これは仏教の真言書である。言葉や音韻に関する知識や興味も大小あったのではなかろうか。

桃溪は、狂歌集に絵筆を執ることも多かった。師の鉄格子波丸著『かはころもの記』2冊(文化5年)にも挿絵を描いている。その追悼集のあり方からしても、彼には、狂歌師としての要素が大きく、その絵心もここに出处が大きいのであろう。

上には、また、『紙漉重宝記』(国東治兵衛選)、『農家益』(大蔵永常著)、『朝鮮珍花薈集』(三木探月齋写真)、『牽牛品』(峰岸竜父著)のような産業技術書や植物図譜が見えている。桃溪には、この他、『鼓銅図録』1冊(増田綱撰、享和元年)の挿絵もある。これは、製銅工程、及び、その道具類について詳細に写生したものであり、大坂の住友家が自家版として出版したとされる。今、『日本科学古典全書』の第9巻(朝日新聞刊)にも収められており、版本の写し(写本)が福井市立図書館に保存されている。

靖中菴桃溪は、『本朝名家画譜』(文化11年)を著すような著名な絵師であり、狂歌師でもあった。地誌(名所図会)、節用集、狂歌集、読本などにも積極的に挿絵の筆を執ったようだが、その性向の一つとして窺われるのは、才知にあふれ、自然界や各種産業・技術に対する興味の旺盛であったことではなかろうか。薬種屋に生まれ育ったせいでもあろう、彼の、自然や実地の産業・技術を尊重する姿勢には、今日の科学者にも通ずるものがある。『紙漉重宝記』(紙業)、『農家益』(農業)、『牽牛品』等(植物)、『鼓銅図録』(鉱物)などは、そうした興味の結実したものであり、これらの図解や写生資料は、科学・産業史上、高い価値を有するものである。

おわりに

江戸時代には、幕府による政治的安定と経済活動の発展を背景に、営利事業としての出版業が発展し、隆盛を迎え、市井には、娯楽書、文芸書、教訓・教養書、また、漢籍や仏書などの出版物が溢れるようになった。中でも、教訓・教養書には様々なものがあるが、多くを占めるの

は「往来物」や「重宝記(調法記)」の類である。広い意味では頭書欄を充実させた「節用集」類などもここに含まれよう。それぞれに幾多の種類があり、各々に重版、類版も重ねられ、その実情は、今日、未だに整理できないほどである。当時、これらが如何によく利用されたかを物語っていよう。

『紙漉重宝記』は、そうした内の「重宝記(調法記)」類の一つである。このジャンルは、日常教養書としての性格が強く、同趣の名を付した著作は少なくない(書札調法記、世話重宝記、不断重宝記大全、万民調法記、呪詛調法記、陰陽師調法記、医道日用重宝記、嫁娶重宝記など)。

本稿では、その成立事情、概略、著者、また、版本、複製本等、開版のいきさつ、書肆等について整理することとなった。

『開板御願書扣』によれば、『紙漉重宝記』の申請は「長堀清兵衛町」の「作者 麻屋次兵衛」として行われている。この前後、治兵衛の日常的な生活・営業の本拠は、大阪・長堀清兵衛町にあったのであろう。店を構えるに際し、営業許可を仰いだのは「麻屋」であったかも知れないが、この時分、彼は、浜田藩の特産物を扱う特定業者として、また、石州一帯の物産を取り扱う商人の一人として、それなりの地歩・財産を築いていたであろう。とはいっても、直ちに上方出版の最大手から出版できるわけではない。出版には各方面からの後押しも資金も必要である。

彼の取扱産品は、麻、藺草、畳表、椎茸、和紙などがその主なものであったであろうか。中でも、石州半紙は、良質の印刷・製本用紙として評価が高く、上方出版業者が大量の、かつ、安定的な供給を求めるところであったと推測される。出版業者の営業を支えるのは「紙の間丸」、即ち、紙問屋でもあった。治兵衛は、大野木(秋田屋)市兵衛、海部屋勘兵衛などの出版業者と密接な取り引き関係にあり、また同時に、その周辺の著述者、俳句・狂歌等の作者、絵師などとも親交を持っていたはずである。彼の文人としての一面は、こうした取り引き先や文人達との交遊の中で育まれたものと考えられる。

当時、家業を興し、家産をなした商人たちの中には、40代、50代で手代に名跡を譲り、楽隠居として芸能や文芸、旅行などの趣味に生きる者がいた。こうした文化的なたしなみは、番頭以下には許されないことであり、むしろ彼らのステータスとして必要とされるところでもあった。治兵衛もそうであったかどうかはわからないが、狂歌や俳句を詠み、また、紀行文を綴り、俳画を慰みとしたのは、相応のゆとりを得て後のことであつたと思わ

れる。『紙漉重宝記』の執筆、上梓の話も、そうこうする内、出てきたかも知れない。その「自序」末に見える「友人」とは、同業者というより、やはり、狂歌や俳句の寄り合いを催し、旅や絵を語り合う文人仲間であったであろう。あるいは、その中に大野木市兵衛か海部屋勘兵衛あたりもいたのかも知れない。

『紙漉重宝記』の版下は、治兵衛の「自筆版」であるとされ、挿画についても、「治兵衛の考案による巧みな絵を、桃溪が補筆したものである」との意見がある（既出、矢富熊一郎氏説）。治兵衛の筆跡や画風が分からないので、何ともいえないが、挿絵については、桃溪の知名度や仕事量からして、あり得ることかと思われる。もし、そうとするなら、「補筆」がどの程度であれ、商業戦略的に「桃溪」の名が冠せられたことになる。治兵衛にとっても桃溪にとっても、そして、版元にとっても、得るところがあつての名義貸しであろうが、こうした場合にしても、大野木市兵衛あたりが仲介、段取りしたのではなかろうか。

ところで、俟たれるのは、やはり、菊井茂一氏宅で見つかった国東治兵衛の自筆本類を再発見することであろう。これらを分析すれば、彼の日常的な生活状況、素養や趣味、性格など、より詳しいことが判明するであろう。芸事・習い事には、必ず師があり、友がいる。その交友圏も、自らはっきりしてこよう。彼の俳号なり、狂名なり、また、雅号なりが分かれば、彼の作品類も収集できるかも知れない。文人としての活動状況が判明すれば、文学史上の位置付けも可能となろう。場合によっては、彼の墓所や菩提寺、過去帳なども調査できるかも知れない。何と云っても、自筆本類の再発見が俟たれる次第である。

なお、『紙漉重宝記』については、その記述内容、即ち、楮の栽培・売買、製紙の工程、原料・粘り剤、道具類、方言、また、その画風などを分析しなければならない。特に、史的な観点から、その意義・価値等を位置付けておかねばならない。多少の用意はしたものの、既に、紙数も超えているので、これらについては、後日に委ねることとする。

〔謝辞〕

本研究を行うにつき、国立国会図書館、国立公文書館、東京都立中央図書館、大阪府立中之島図書館、玉川大学図書館、紙の博物館、島根県立図書館、益田市立歴史民俗資料館、益田市立益田図書館、益田市安田公民館、また、小宮英俊氏、新松晴美女史、中尾洋介氏、中村亀寿氏、福原克己氏、矢富殿夫氏・敦夫氏、森 県氏、その

他、多くの先学には格別の御指導をいただいた。記して御礼申し上げる次第である。